

原 明美 (音楽評論家) Akemi Hara

## ブラームス：ピアノ四重奏曲 第3番 ハ短調 Op.60

ロマン派の室内楽曲では、古典派の伝統に緊密に結びついた作風の作曲家に、傑作が多い。シューベルト(ピアノ五重奏曲「鱒」など)、メンデルスゾーン(「ピアノ三重奏曲第1番」など)、シューマン(「ピアノ五重奏曲」など)、そして、ブラームスである。

ドイツ・ロマン派の作曲家ヨハネス・ブラームス(1833~97)の残した室内楽曲は、全部で24曲あるが、いずれ劣らぬ名作ぞろいであり、充実したジャンルを形成している。このうち、ピアノを含む編成による作品は、ピアノ五重奏曲、ピアノ四重奏曲(3曲)、ピアノ三重奏曲(3曲)、ホルン三重奏曲、ヴァイオリン・ソナタ(3曲)、チェロ・ソナタ(2曲)、クラリネット・ソナタ(2曲)、以上15曲。ピアノを含む室内楽曲、特に三重奏以上の編成の作品では、ピアノが加わる効果で和声やリズムが豊かになる一方、その打弦音が弦楽器や管楽器と融合しにくい音質であるため、合奏は対立的となり、協奏的重奏のような性格を帯びる。ブラームスは、こうした特色をふまえつつ、古典的な構築美と、表情に富むロマンティックな語法を結合させ、音楽史に残る室内楽曲の傑作を残した。

ブラームスの3曲のピアノ四重奏曲のうち、第1番Op.25と第2番Op.26は1861年に、第3番Op.60は1875年に完成されており、その間に10年余りの開きがあるが、実は3曲とも、作曲の構想が立てられ始めたのは1854年から1855年ごろのことだった。青年ブラームスは、1853年にローベルト・シューマン家を訪問して以後、この先輩作曲家から大きな影響を受けることとなるが、そこには、シューマン夫人クララとの複雑な愛情がからむ。また、ブラームスは、シューマンのライン河投身自殺未遂事件や、1856年の彼の死にも直面した。このころに書かれ始めた3曲のピアノ四重奏曲のなかに、20歳代の多感な青年にふりかかったこれらの出来事の翳りを、聴き取ることもできるだろう。

今回は、ピアノ四重奏曲の第3番と第2番が演奏される。第3番は、第1番および第2番よりも早い時期から着手されたとみられるピアノ四重奏曲だが、1854年4月に一旦完成されたときには、現在ある形ではなく、嬰ハ短調で書かれ、しかも、3楽章制の作品だった。しかし、1856年4月にブラームスが、友人でもあるヴァイオリニストのヨーゼフ・ヨアヒムを訪ねて、試奏したところ、2人とも満足せず、曲は改訂されることとなった。ヨアヒムの助言も仰ぎながら何度も改訂が繰り返され、1875年によく最終的な完成をみる。第1楽章はハ短調となり、第2楽章については、原調のホ長調のままで少し手を加え、それが第3楽章とされた。新たに第2楽章としてスケルツォが置かれ、そして終楽章には、新しく書き直されたハ短調のものが用いられて、全4楽章の作品に仕上げられたのである。

ブラームスのピアノ四重奏曲のなかで、特にこの第3番では、崇高にして悲劇性を帯びた曲想が、印象的である。そして、ここには、ローベルト・シューマンの悲劇的な死や、ブラームスがクララ・シューマンに寄せる複雑かつ絶望的な愛が、ある種の具体性さえ伴って投影されている、とも解釈されている。なお、曲は、1875年11月18日にウィーンにて公開初演された。

**第1楽章** アレグロ・ノン・トロポ。ハ短調、ソナタ形式。暗い悲壮感に包まれたような第1主題に始まる。一方、いくぶん抒情的な第2主題は、変奏を繰り返す。その後、明快な2部分構成による展開部を経て、再現部では和声構造や楽器の配分が変えられるが、悲劇的な重苦しさを残したまま、楽章を閉じる。

**第2楽章** スケルツォ:アレグロ。ハ短調、3部形式。跳躍など軽快な動きに彩られながらも、簡潔にまとまったスケルツォであり、ハ長調による大らかな中間部がはさまれている。

**第3楽章** アンダンテ。ホ長調、ソナタ形式。チェロによって歌われる、深い感情のこめられた美しい第1主題が、とりわけ印象的である。第2主題は、対位法的な書法で進む。短めの展開部を経て、再現部となり、穏やかな雰囲気うちに終わる。

**第4楽章** フィナーレ:アレグロ・コーモド。ハ短調、ソナタ形式。共に伸びやかな2つの主題を中心に展開するが、この楽章では特に、ヴァイオリンの活躍が目立つ。そして、緊張感のある響きのなかで、楽想が抒情的に奏でられてゆき、最後は、ハ長調の力強い和音で全曲が締めくくられる。

## ブラームス：ピアノ四重奏曲 第2番 イ長調 Op.26

ト短調の第1番Op.25とはほぼ同時期の作品だが、第1番が短調で書かれ、独創性が目立つのに対し、第2番は長調により、オーソドックスな構造で作られているなど、2曲の作風は対照的である。1855年に着手された第2番は、未完成のまま放置された時期を経て、1861年に書きあげられた。さらにブラームスは、ヴァイオリニストのヨアヒムに譜面を送って意見を求め、彼の助言を受けて改訂を加えたうえで、同年10月に最終的に完成させた。そして、作曲当時ブラームスが世話になっていたレージング博士の夫人エリザベトに献呈され、1862年11月29日にウィーンにて、ブラームス自身のピアノとヘルメスベルガー弦楽四重奏団によって初演された。曲は、次の4つの楽章から成る。

**第1楽章** アレグロ・ノン・トロポ。イ長調、ソナタ形式。明るい曲想と共に、特徴的なリズムが印象に残る楽章である。

**第2楽章** ポーコ・アダージョ。ホ長調、ロンド形式。ピアノが主役の緩徐楽章。弱音器を付けた弦楽器の響きに包まれるなかで、ピアノがロマンティックに旋律を奏でる。

**第3楽章** スケルツォ:ポーコ・アレグロ。イ長調、3部形式。凝った作りが目されるスケルツォ。主部も中間部も、2つの主題を持つソナタ形式に従っており、さらに、中間部には、カノンが用いられている。

**第4楽章** フィナーレ:アレグロ。イ長調、ロンド形式。ハンガリー風のリズムを伴い、明るく力感に富む曲想に彩られたフィナーレである。